

国語 試験問題

二月十日実施

注 意

- 一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、問題は余白をふくめ、十八ページにわたっています。
- 三、試験時間は五十分間です。
- 四、答えはすべて解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

京華高等学校

受験番号
氏名

余
白

問題は次のページから始まります。

余白

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 ついこないだ中間テストが終わったところだと思っていたのに、早くも期末テストの季節がやってきた。

——百井は、どうなるんだろう。あんな状況で。

いくらポーカークフェイスといえど、あれだけ毎日イヤミや悪口を言われれば、精神をすりへらさないはずがない。そんなことを考えるたび、俺はひりつくような罪悪感を持って余した。その一方で、家に帰ると机に向かうことも、やめられなかった。

思うに、最低なんだけど、ほんとに最低最悪なんだけど、俺はこんな事態に至ってさえまだ、かすかな期待をしてたんだ。今度こそいいよトップ奪還なるか、って。

しかし——。

信じがたいことに、そうはならなかったのだ。またしても。

十二月の初め。

返却された順位表に、見飽きた「二位」の数字を見た瞬間、俺は絶句した。

嘘うそだろ？ 弾かれたように、百井のほうを見る。が、ヤツはその場で順位表を開くことすらせず、あっさりとボロカバンにしまいこんだだけだった。まるで、わざわざ確認などしなくたって結果は分かっている、とでもいうように。

負けた、とその瞬間、確信した。

何も言いわけは浮かばない。脱力するしかなかった。

——帰ろう。今日は何もする気になれない。

「きりーつ、れーい」の号令が終わるなり、がやがやと騒がしくなり始めた教室を、俺はいち早く出ていこうとした。が、カバンを手に、力なく立ち上がった時だった。

「もーもい！ お前、何位だよ？ ちよい見せろって」

教室に響く、

A

耳ざわりな声。

はっとふり向くと、例によって、嫌がらせの首謀者たち数人が、百井の席を取り囲んでいるのが見えた。百井を見下ろす

どの顔にも、意地の悪い笑みのはりついている。見たところ、筆頭に立っているのは山居と岸上だ。特に、柔道部の山居は高校生並みにガタイがよくて、やせっぽちの百井はいっそう弱々しく見えた。

やばい、と思ったのは、百井の身を案じたからじゃない。この期に及んでなお、自分の身を案じたからだった。百井に負けたと思われたくない。知られたくない。なけなしのプライドが、俺をどこまでも利己的にしたんだ。

「お前らさあ、いかげんにしろって！」

² 気がつくと、山居と岸上の間に割って入っていた。

突然の乱入者に、山居は、鳩が豆鉄砲食らったような顔でぼかんと俺を見る。が、岸上のほうは、「いや、なんでお前が止めんの、矢代」とくちびるの端で苦笑した。

「……さすがにやりすぎっていうか。そろそろいいんじゃないやねえの。後味悪いって」

「はあ？ お前が言うなよ、ソレ」

俺がぐつと押し込まると、岸上はハッと鼻を鳴らし、こちらに背を向けた。

山居もわれに返ったように、「いいじゃん。勝手に見ちゃおうぜ」と、机の上の百井のカバンに手をかける。と、そこで初めて百井が、ゆっくりと立ち上がった。そうしてそのまますばやく山居からカバンをひったくり、くるりときびすを返そうとした。

「あつ、逃げんなよ、バカ！」

岸上が舌打ちをし、百井の肩に手をかける。

「だから、やめろって！」と、俺が叫ぶ。

そこからは、もみ合いになった。俺が岸上の腕をつかんで阻止しようとするそばで、山居が百井のえり首をつかみ、力任せに引き戻す。げほつとせきこんで、百井はあつけなくよろけた。その手から、カバンがずりりとすべり落ちる。

まるで、スローモーションみたいだった。

身体をねじった百井が、バランスを失って、倒れ込んでいく。

教科書やノートが床に散らばるのと、百井が、ガタタンツ！ と激しく机ごと床に倒れ込んだのは、一体、どちらが先だっただろう。その場にいるだれもが息をのむ中、百井は、ゆっくりと床から身を起こした。見ると、その額から、流れ落ちるものがある。

「血だ」

と言ったのがだれの声だったのか、俺には分からなかった。

B 空気の中、百井だけがぎこちなく額に手をやる。そうして、赤く染まった指先を自分で確認すると、「うん、血だ」と、小さな声でつぶやいた。

「もう一度聞く。お前ら、なんでこんなことになったんだ？」

放課後の職員室。

山居、岸上、俺の三人は一列に並べられ、ザワ先に尋問を受けていた。

どうやらさつきもみ合っている間に、だれかが担任を呼びに職員室へ走っていたらしい。そういえば俺たちがおたおたしているかたわらを、小走りで駆けていく女子ふたりを視界のすみに見たような気もする。美術部の瀬川と佐古——だったような気もするけれど、今となっては、それがだれでもたいした問題ではなかった。ともかく現場に駆けつけたザワ先は、惨状を見るなり眉をつり上げた。で、流血している百井はひとまず保健室へ向かうこととなり、俺たちだけが先に職員室へ連行されたのだけ——。

「え？ 山居、説明ぐらいしろよ。何がどうなって百井が怪我したって？」

C 話問に、山居は居心地悪そうに、上履きの爪先で床を蹴る。

「……ふざけてどつき合ったら、百井がよろけて、それで、」

「ほう。岸上も矢代も、同じ言い分か？」

ぎろりと **D** 視線を送られ、俺と岸上は、うつむいたままだまり込んだ。

職員室へ向かう廊下ではばくばくしていた心臓は、今ではすっかり冷えていた。百井へのひがみ、ドツジの後で百井につかかったこと、ハブられる百井を見て見ぬふりをしたこと……そのすべてが、今となってはなんてバカだったんだろうと思つた。ちよつと冷静になれば、どつかでストップをかけることくらい簡単だったはずなのに——。

びりびりした硬直状態が、一秒、二秒、三秒……とつづいた、その時だった。

「失礼します」

落ち着いた声が入り口から響き、額にガ―ゼを貼った百井が職員室へ入ってきた。

「百井、怪我は大丈夫か」

心配そうに眉をひそめたザワ先に、百井はあっさりうなずいた。

「はい。傷はたいしたことなくて、病院へ行くほどでもなかったの」

「そうか」

ザワ先はほっとしたようにうなずき返し、それから、表情を引きしめてつぶけた。

「百井、どういう経緯でお前が怪我したのか、教えてくれないか。山居たちからは、ふざけ合ってただけと聞いたが……俺を呼びに来た女子は、お前が一方的に絡まれてた、と言ってたぞ。それに、以前からお前に対する嫌がらせがあった、とも」
なあ百井、とほとんど必死な様子で、ザワ先は言う。その声には、演技ではない悲しみとやるせなさがにじんできて、こんな時なのに、俺はザワ先のことをちよっと見直していた。と同時に、ああこれまでだ、と観念する気持ちにもなった。百井は安堵して、これまでに受けた数々の仕打ちを暴露するに決まってる。そうするべきなのだ。

百井がどんな表情をしているのか、うつむいて足元を見つめている俺には、まったく分からなかった。でも、百井がゆつくりと身じろぎしたのは、気配で分かった。

——来る。

「山居くんたちの、証言のとおりです」

ぐっと身を縮めた俺の隣で、百井の音が、すっきりと響いた。瞬間、俺ははっと顔を上げた。いや、俺だけじゃない。山居も、岸上も、ザワ先も。

⁴「ふざけてて、僕が、ひとりで転びました」

淡々とした、けれど、はつきりとした口ぶりだった。俺たちにびびってるから、という感じはまるでない。意思のはっきりしたしゃべり方に、俺たちは、完全に不意をつかれた。

「……いや、百井。本当のことを言ってくれ。それでお前の立場が悪くなるようなことには、俺が絶対させないから。なぜ？」
ザワ先のほうがよほどあせった様子で、百井のほうを見る。しかし百井はおだやかな仙人みたいな顔をして、「いえ。本当のことですから」と、言い切った。

「心配かけて、すみませんでした」

これでおしまい、とでも言うようにふかぶかと頭を下げる百井を、俺たちはあっけに取られて見つめた。

とまどいがただよう沈黙の中、百井ひとり、平然とたたずんでいる。

「…分かんねえ。マジで、わけ分かんねえ。なんで俺たちをかばったのか。裏があるのか。単なるバカか。お人よしなのか。」

職員室から解放された後、山居と岸上は気まずさから逃げるように、「塾があるから」と、そそくさと帰っていった。そんなわけで俺はなりゆき上、百井と並んで、廊下を歩くことになったのだった。もちろん、そうとう居心地は悪い。百井はしゃべらないし、何を考えているかも分からないし、俺だって、なんて話していいのやら。

「…なんだよ、さっきの」

と、ようやく俺が口を開いたのは、靴箱の前にたどり着いた時だった。

上履きを脱ぎようとしていた百井が、顔を上げて俺を見る。そして、ふっと目を細めた。

「…この学校ってさ、いい人、多いじゃん」

「は？」

何言ってるんだこいつ、と俺は思った。勉強できるくせに、バカなのか？

「いや、うん。矢代くんの言いたいことは分かるよ。分かるけど」

俺のあきれた表情を読んでか、百井は、あわてたように言葉をつぐ。

「でもやつば、基本いい人たちだと思うんだ。だって今までうちのクラス、あからさまないじめってなかったじゃん。派手な層と地味な層が共存をはかれてた、っていうかさ。僕、前に住んでた町では、もつとロコツないじめ受けてたし」

共存。全然びんときてない俺に、百井は一瞬がっかりしたようだったけど、「だからさ」とすぐに気を取り直したように、言った。

「みんな根はいい人たちだから、あの場で僕がフォローしておいたほうがいいのかな、って思ったんだよね。そのほうが、良心にうったえられそう、っていうか」

「…：…いやいやいや」

樂觀的すぎるだろう、と俺は今度こそあきれた。だって俺たちをかばうことで、「こいつには何言っても平気」って、かえってナメられることも、大いにありうる。

「たしかに、イチかバチか、ではあったけど。逆効果の可能性もあるしね」

百井は鼻の頭をかいて、苦笑した。

「でも、明日から少なくとも、山居さんと岸上くんは嫌がらせしてこないと思うな。だってさつきも、すごく気まずそうだったじゃん」

「……………」

「それに矢代くんだって、ドッジの日の後は、一度も僕につつかかってこなかっただろ？ あれって、後悔したからだよ？」

「……………」

「ね？」

と、百井は、ガキを論すオトナみたいな顔で笑うと、ゆっくりとした動作で上履きを靴箱にしまった。かわりに、うす汚れたスニーカーを取り出して、ぽつりと言う。

「みんな、本当の悪人じゃないんだよ。半年同じ教室でいたら、それぐらいは分かる」

百井の言うことには、たしかに一理あるような気がした。残酷な衝動や、意地悪な感情は、きつとだれの中にもある。俺の中にも、クラスのヤツらの中にも、きつと。

だからって、こんなに、簡単に許せるんだろうか？ いや、「許す」も何も百井ときたら、ハナから俺たちのことを恨んですらいないように見える。

でも——きつと、そうなんだ。百井は恨んでないんだ。本当に。

「…………バカじゃねえの？」

と、俺はようやく、それだけつぶやいた。

「ほんっと、お前って、バツカじゃねーの？」

「うん。そうかもしれない」

ふり向いた百井は、いい笑顔をしてた。心をトン、と突かれるような。

その瞬間、俺の中から、百井に対する敵意や嫉妬がすうっと消えていった。くやしいけど負けたな、って思えた。ああ、俺とはまるで器がちがう、って。なのに、どうしてだろう。これほどおだやかで、晴れやかな気持ちになれたのは、

ずいぶん久しぶりだったんだ。

だから俺は、決めた。

明日から、どうなるのか分からない。

5 百井への嫌がらせはまだつづくかもしれない。むしろ過熱するかもしれない。
それでも俺はちゃんと、こいつの味方だよ、って。

(水野瑠見『十四歳日和』による)

1. A D にあてはまることばとして適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア どのきいた イ 悪意のこもった ウ 疑わしげな エ 凍りついた

2. ——— 線部 1 に「——百井は、どうなるんだろう。あんな状況で」とありますが、このときの「俺」の心情を説明したものと最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア いじめに遭っている百井を心配しつつも、このままいじめが続いて百井が学校に来なくなれば、いじめがばれることはないだろうと考えている。

イ 百井をいじめていることを悪いと思いつつも、いじめの影響で百井の成績が下がれば、自分が首位に返り咲くことができるのではないかと考えている。

ウ 壮絶ないじめにも動じない百井を恐れつつも、このまま勉強を続けていけば、勉強では自分の方が百井よりも優秀だと証明できると考えている。

エ 百井に対するいじめを止めるべきだと考えつつも、安易に首を突っ込めば、今度は自分がいじめられる可能性があると考えている。

3. ——— 線部 2 に「気がつくつと、山居と岸上の間に割って入っていた」とありますが、「俺」がこのような行動を取った理由を答えなさい。

4. ——— 線部 3 に「——来る」とありますが、このときの「俺」の心情を本文中のことばを用いて四十字以内で答えなさい。

5. ———線部4に「ふざけて、僕が、ひとりで転びました」とありますが、このように答えた百井の意図を説明した次の文の **I** ～ **IV** にあてはまることばを、それぞれ指定字数で抜き出さない。

このクラスは性質の異なるグループ同士でも **I** (二字) できており、目立った **II** (三字) もなかったことから、本当はみんな **III** (三字) ばかりだと考えられるので、あの場でかばうことで **IV** (二字) にうったえるほうが得策だ。

6. ———線部5「それでも俺はちゃんと、こいつの味方でいよう」と思った理由として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア 成績優秀でトラブルの決着の付け方もふところが深い百井に対し、かなわないことを素直に認めようと思ったから。
- イ 百井は嫌がらせをされていても怒りを押し殺して行動しており、その精神力は敬意を表するに値すると思ったから。
- ウ 先生に告げ口をしないでいてくれたおかげで、クラス内の百井への嫌がらせに対策する時間ができたと思ったから。
- エ 百井が先生に対してきっぱりと嫌がらせの事実を否定してくれたので、何があっても恩返しをしようと思ったから。

7. この文章の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

- ア クラスのグループごとの動きが具体的に表現されており、それぞれの中心人物が明らかに描かれている。
- イ 出来事が克明かつ時系列に沿って表現されており、場面や心情の移り変わりがわかりやすく描かれている。
- ウ 生徒と教員の埋められない溝に焦点を当て、嘘と真実をはっきりと説明しながら双方の対立が描かれている。
- エ 「……」という余韻を持たせた表現を効果的に用い、登場人物の心情を読者がイメージできるように描かれている。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「価値と価格」は、ともすれば混同しやすいものです。価格とは何か、価値とは何か¹という点をきちんと整理して理解できれば、人生において無駄な買い物をせずに済みますし、物事の本質を見抜く目を持つことができるようになるはずです。君たちが牛井一杯に感じる満足感は、当然のことながら君たちのその時のお腹の空き具合で異なります。死にそうなくらいお腹が空いている時に食べる600円の牛井は、お腹がいっぱいの時に食べる5000円の焼き肉よりも美味^{おい}しいかもしれません。また、同じ600円の牛井でも、牛肉があまり好きではないB君からすれば400円の満足感しかないかもしれません。

「価値」とは君が受け取る効用（≠満足感）であり、君がおかれた状況によっても異なるし、他の人との比較においても全く異なるということです。²

²ダイソンの扇風機って面白いですよ。風を起こす羽根がないのも画期的で面白いですが、もっと面白いのはその値段です。4万円以上します。隣に並んでいる普通の扇風機が4000円なのに……。

扇風機なんて、涼しい風を送ってくれるという機能だけあればいいやと考えている人からするとありえない価格です。でも売れていますね。なぜでしょうか？ この「羽根のない扇風機」には送風するという機能以外の効用があるからですね。その効用とは何でしょうか？

私は、あの近未来的なデザインにこそ別の効用があると考えています。送風するという「機能的効用」と区別して、それを「意味的効用」と呼ぶことにします。この2つの効用を足したものに人は「価値」を見出す^{みだ}のです。³

³実は身の周りを見渡すと、この「意味的効用」に裏付けられたモノがあふれています。たとえばiPhoneなどもそうですね。あれを組み立てる上で必要なパーツの部品代、作業にかかる労働コスト、宣伝等にかかった経費などを積み上げたとしても、10万円前後の定価に対して、恐らくこれらの経費はせいぜい2、3万円程度だと思えます。

また、iPhoneのボディはアルミ製ですが、別に値段の高いアルミである必要はないわけです。実際、今ではガラケーと呼ばれている携帯電話のほとんどは強化プラスチックでできていました。iPhoneが、なぜアルミなのかというと、それは見た目のデザイン以外の何物でもありません。ダサイプラスチック製よりもアルミ製の方が、はるかに高級感があるのです。

それから無駄にボタンのない様式美。これこそが iPhone の生みの親・故スティーブ・ジョブズ氏が追求した美しさであり、iPhone に熱狂する人たちが共有する「意味的効用」なのだと考えています。

そういう風に身の周りを見渡してみると今の日本では、「機能的効用」以外のさまざまな「意味的効用」に立脚した価値を見つけることができるでしょう。なぜか？

それはモノの時代が終わって、価値観が多様化してきたからです。

皆さんのお父さん、お母さんが子供だった時代、モノが足りなかった時代は、モノの機能面の効用が重視されました。

A 自動車は走るのが機能ですし、テレビは映像を映し出すのが機能です。その機能的効用に対して多くの人はお金を払いました。

機能的効用は、誰が評価してもそれほど金額にブレはありません。たとえば目の前にある軽自動車の新車価格を5人に言わせたら、恐らく100〜150万円くらいの価格帯で落ち着くでしょう。「小さい車」、「実用」、「走る」、「4人乗って荷物が載せられる」、「燃費がいい」という軽自動車に対する認識は5人ともそれほど変わらず、B 彼らが受け取る価値がそれほどブレません。その結果、「この車に払ってもいいかなあ」と思える価格にもそれほど大きな違いが生じないのです。

C、モノがあふれる時代になると、機能的な効用よりも意味的な効用が重視されるようになり、価値の大きな部分を占めるようになります。意味的効用は、ダイソンの羽根のない扇風機に代表されるような「スマートさ」や、iPhone ユーザーが感じる「かつこよさ」、「しっくりくる」操作性など、人の感性に訴えるものです。本来的に多様性を持ちます。すこく「ハマる」人もいれば、まったく価値を感じない人もいます。

このことは皆さんが大人になって働く時にも重要なヒントになります。機能的効用は誰がどのように評価しようとも大きな差がつかないのであれば、意味的効用を極めるように働いた方がたくさんのお金をもらえる可能性が高いということです。モノがあふれている現代においては、「価値」というものを「機能的効用」と「意味的効用」に分解して考えることで、自分が受け取るものが何なのかを具体的に考えるクセをつけましょう。

同時に次は「価格」についても分析的にアプローチしてみましよう。皆さんはファミリーレストランでご飯を食べる時、ハンバーグ定食の値段を当てることができますか？ ホテルでご馳走のディナーを食べる時に、自分が注文したメニューがいくらなのか意識したことはあるでしょうか？

価格というものを考える上で参考になるアプローチをいくつか紹介しましょう。

一つめは「コスト（費用）」という切り口です。イタリアンレストランに行った時のことを想像してみましょう。君たちがパスタを食べて会計するまでに、どんなコストがかかっているでしょうか。パスタや調味料の材料費、シェフやウェイターの人件費、光熱費、レストランの地代などでしょうか。これらの費用の上にレストランは儲けである利益をのせて、君たちに請求する価格を決定します。このようにレストランの場所（地代）、使われている材料、働いている人数などの費用を考えることは、いざだ料理の価格を推測する手法の一つになります。

価格を分析する上で役に立つアプローチの2つめは「プロセス」に分けるといいます。

たとえば、皆さんが床屋に行つて3000円支払つたとしましょう。床屋に入つて椅子に座りました。すると、①髪をカットしてもらいました。②ヒゲを剃つてもらいました。③頭を洗つて、乾かしてもらいました。そして最後に④肩をもんでもらいました。これらすべてのサービスを受けて3000円なのです。この時、カットには1500円くらい、シェービングに800円くらい、というように総額3000円という床屋さんに払うお金を、作業ごとに分解していくのです。

こういうアプローチを「アンバンドリング」といいます。世の中の財・サービスの多くは「バンドリング」されています。簡単に言うとセット販売です。先ほどの話に出てきた福袋はバンドリングの典型例ですね。他にもパソコンとソフトウェアはセットで売られており、別々に買うよりも少しだけ安く価格設定されています。携帯料金などもいろいろな（あまり使わない）サービスがくっついていきます。

一方、君たちの中にも使っている人はいると思いますが、カットだけで1200円（2021年2月現在）という「QBハウス」のサービスはアンバンドリングサービスの一種なのです。

価格決定を考える上でもう一つ考えるべきは「競争」です。競争経済においては、公正な競争は価格を下げるプレッシャーになります。たとえば牛丼チェーン同士の競争は熾烈を極めるので、君たちはすごく安い価格で牛丼を食べることができません。半面、公正な競争が行われていない財・サービスでは、消費者は高い価格で我慢せざるをえません。

たとえば毎月払っている携帯電話料金は2021年に値下がりましたが、それまでは他の国との比較でも非常に高いままに放置されていました。これは代表的な携帯電話3社に競争原理が働いていなかったことを意味します。本来であれば、人気タレントを使った似たようなコマシヤルに高い費用を使ってライバルから利用者を奪うことよりも、料金を下げることの方が勝つべきでしょう。しよせんのキャリアを使つてもほぼ同じサービスなのだから……。 (中略)

レストランやスーパーに行ったら、モノの値段がある程度当てられるくらいになるまで経験を積みましょう。こちらの方は「価値」の本質を考えるよりも圧倒的に簡単です。紹介した3つのアプローチで分析的に考えることで、冒頭にあったような福袋で後悔する可能性を減らすことができるはずです。

「価値」と「価格」が異なることは理解できたと思いますが、これからもっと重要なことを言います。

それは、「価値」↓「価格」の順番で考えようということです。

そうしないと、⁵「価値」が「価格」に引張られてしまうからです。欲しいモノがある時、よっぽど意識しない限り最初に目に飛び込んでくるのは「価格」です。それが予想より安ければ、本当に必要なモノか、本当に大事なモノかどうかにかかわらず、「これは安いな！」と飛びついてしまうものです。

この間違いは、モノを買う時ばかりではありません。5000円のバッグを持って歩いている人よりも、10万円のバッグを持ち歩いている人の方が、立派な人だと錯覚してしまいがちです。でも人の本当の価値は、「高いモノ」を持っているかどうかで決まるわけではありません。

これでは他人が決めた「価格」の奴隷になっているのと同じです。そうならないためには、「価格」より前にまず「価値」について判断する必要があります。

(奥野一成『先生、お金持ちになるにはどうしたらいいですか?』による)

1. A C にあてはまることばとして適当なものをそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア したがって イ でも ウ または エ たとえば

2. ——— 線部 1 に「価値とは何か」とありますが、筆者が考える「価値」の説明として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア その物自体に付けられている価格をもとに、世間のどのくらいの人数が満足感を得られるかの度合。

イ 他の人の感覚とは関係なく、その人自身がどのくらいそれを手に入れたいと感じるかの度合。

ウ 人々がどのくらいの頻度でそれを手に入れられるかによって異なる、物自体が持つ希少さの度合。

エ 自身の状況や他の人との感覚の違いによって異なる、その人自身がどのくらい満足するかの度合。

3. ——— 線部 2 に「ダイソンの扇風機って面白いですよね」とありますが、筆者は「ダイソンの扇風機」のどのような点を「面白い」と表現していますか。「機能的効用」「意味的効用」という二つのことばを用いて答えなさい。

4. ——— 線部 3 に「身の周りを……あふれています」とありますが、この理由を二十四字で探し、初めと終わりの五字をそれぞれ抜き出さない。

5. ——— 線部 4 に「価格と……紹介しましょう」とありますが、筆者の考えるアプローチの説明としてあてはまるものは○、そうでないものには×をそれぞれつけなさい。

ア コストには材料費や人件費に加え光熱費や店が得る利益も含まれる。

イ 商品やサービスをパーツや作業ごとに分解して考えることを「アンバンドリング」という。

ウ 同じ商品やサービスについて企業間で公正な競争が行われることで価格が下がる。

エ 価格について分析するうえで大切なことは多くの商品を購入する経験を積むことである。

6. ———線部5 「『価値』が『価格』に引っ張られてしまう」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「『価格』に引っ張られてしまう」を比喩的に言い表したことを十三字で抜き出さなさい。

(2) 筆者は「『価値』が『価格』に引っ張られてしまう」ことをよくないと考えていますが、それはなぜですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 価格のことを先に考えてばかりいると、安い物は無条件でいいと考えるようになってしまい、本当の価値を見抜く力が失われていってしまうから。

イ 本当に必要なものだけを買うようにしないと、価格だけで考えて unnecessaryなものばかり買ってしまうようになり、消費することに振り回されてしまうから。

ウ 自分にとって必要かどうか、本当の価値は何なのかということを考えないと、他人が決めた価格によって人やモノの価値を決めるようになってしまうから。

エ 本当に価値のある物が何かを考えないと、自分にとって「価値」を判断する基準が揺らいでしまい、価値のある人間に成長することができなくなってしまうから。

7. 筆者の主張に沿って考えたときに、他の三つと比べて異質なものを選び、符号で答えなさい。

ア 歯磨き粉につけられたフルーツの香り

イ 左右どちら側にも開く冷蔵庫の扉

ウ トイレットペーパーの花柄の模様

エ スピーカーの音質の良さ

8. 本文の内容として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 個人の満足感の度合いによって市場に出回る際の価格は決まる。

イ 物事の本質を見極められる人物を指すべきである。

ウ 高価格の商品は他にはない優れた機能をかみならず備えている。

エ 昔は意味的効用で価格が決定することはなかった。

三、次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 豊かな土壤を手に入れる。
- ② 僅差で彼に勝利した。
- ③ 無駄な情報が氾濫している。
- ④ 愚鈍な自分に腹が立った。
- ⑤ すっかりと気持ちが萎えてしまった。

四、次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① ケイジが捜査をしている。
- ② ナンシキ野球部に所属する。
- ③ エイリな刃物が腕をかすめた。
- ④ イッセイに下校する。
- ⑤ アルバイトをやトウ。